

報 龍 屋 新 聞

報 龍 屋 新 聞
 本社所在地
 千葉県甲州市
 代 623 7771-28
 0470929912
 0470929988
 (FAXはFAX番号)
 発行部数
 500部
 購読料は
 いりません。
 気が向いたら
 手紙をカンパ
 して下さい。
 今号の移動編
 集所は
 大島郡伊仙町
 阿三(あさん)の
 鈴木雅(まさ)
 さんです。

荷車、曳き佳境に入る

徳之島・伊仙でカマタキ

沖繩・先島行きは次回へ

「奄美移動編集局発」ネム
 イヨ電)水俣を後にした荷車
 は多くの友人知人に無断で奄
 美大島・徳之島入りをした。
 伊集院では平川徹以に再会
 できずに通過してしまつた。
 彼は元平島小中学校の教員
 でナオとは隣り同まつた。連
 夜の焼酎飲みを回に出す。
 また、屋久島・白川山の鈴木
 安さんとはカタイ約束をしてい
 たのに……彼は当新聞社の
 連中房総に実家があり、

ナオとは出発の二日前に会
 っていた。また、種子島の園上
 の笹川宅も訪ねられなかった。
 奥神社の官司で、二十余年前
 にナオは訪ねたことがある。ト
 カラの恵石島に住んでいた坂
 元新熊翁(故人、明治土産)
 が明治三十四年に帆船で漂着
 した折に笹川哲世と言ふ地元教
 員にたいへん世話になったと公認
 は生涯語っていた。ナオはその話
 を「種子島難(まじ)記」とし
 て一冊にまとめ、本をたすえ

て、種子島の笹川宅を
 捜しに出かけた。哲世は
 は大正期に他界してい
 たが、その孫に当たる哲朗氏が僕
 左で、その本をたいへん嬉しく
 くれたいきづかがある。
 荷車は鹿児島市下荒田のこ
 の上もなく金回りの恵に宇植屋
 の入口に五日間保管された後、大
 島運輸のトラックで名瀬入りした。
 その地で急泊。そして徳之島へ。
 同島の電徳港から歩き出し、
 昔念まで海岸線と歩く。歩行
 中に一台の車に声をかけられ、
 「阿三(あさん)のママに、テニスを



「お父さん、まだ畑から帰
 ってないので……」はい、ではあと
 でまた「もしも、ヨリ子さん
 ですか。」「もう、あ、ち、ち、ち
 細張ったのに、つかまはな
 「すまんすまん、図書館で
 昼寝してたもんで」「いまだ、こ
 「喜念(きねん)だけど」「サマさん、いま

2/24 「17号作りを続ける。
 2/23 日向早植(成合電)で「17号
 作りをする。
 2/22 朝九時、天野ひろし君の車で石碓
 の天野宅へ行く。竹割りを続け、そ
 の後壁竹をあじろ編みにする。
 天野父子と三人で。昼過ぎに家
 薄原の吉本宅から荷車曳きを
 始める。旧国鉄山野線(木俣
 大口)軌道敷地の歩道を水俣
 駅まで歩く。約七キロメートル。途
 中で積の袋の雨にたのを大量
 (スバ)のビニル袋ひとつか)に
 捨てる。この夏の竹大工展用の材
 料にするつもりである。
 18時後発出た行丁に乗り。荷車
 の前輪をはずすと丁にも乗車
 が可能である。出水で下車。駅近
 くの野指を考えるが、三時後の田鹿
 旧島行き丁に再び乗り、十二時前
 に終点に着く。市内下荒田の成
 合電に着る。

と告げられる。近くの
 公衆電話から教えら
 れた番号号にかけると、
 「モトコウ子定は……と聞かれ
 る。」「ヨリさんとニコヨシタマ
 さん々に寄らせてもうえれば……
 「いまヨシタマさん、家にいると思
 うから連絡してみて」「どうしま
 す。」「もしもヨシタマさんですか。」「
 「はい」「はじめまして、ナオと申
 します」「お父さん、まだ畑から帰

タビ日誌

2/24 「17号作りを続ける。
 2/23 日向早植(成合電)で「17号
 作りをする。
 2/22 朝九時、天野ひろし君の車で石碓
 の天野宅へ行く。竹割りを続け、そ
 の後壁竹をあじろ編みにする。
 天野父子と三人で。昼過ぎに家
 薄原の吉本宅から荷車曳きを
 始める。旧国鉄山野線(木俣
 大口)軌道敷地の歩道を水俣
 駅まで歩く。約七キロメートル。途
 中で積の袋の雨にたのを大量
 (スバ)のビニル袋ひとつか)に
 捨てる。この夏の竹大工展用の材
 料にするつもりである。
 18時後発出た行丁に乗り。荷車
 の前輪をはずすと丁にも乗車
 が可能である。出水で下車。駅近
 くの野指を考えるが、三時後の田鹿
 旧島行き丁に再び乗り、十二時前
 に終点に着く。市内下荒田の成
 合電に着る。

カマタキの取中なの。そこで泊った。阿三まではきまらぬ中では無理がま。荷車に乗る。」「阿三は「荷車は」「じゃあ、ほしとて、まから（伊仙から）車で迎に行くから」

かくしてナオは阿三のママ車に迎えられ、フロに入り、夕食まで。船走にはり仮眠して翌朝二時からカマタキの手伝い。ナオはすでに火番のローテーションに組み込まれていたのだ。

カマタキは月曜日(3)に始められて、ナオが加わったのは金曜日であった。五日目である。終日、多くの友人たちが出入りしていた。助っ人、食料の差入れ人、見物人さまざまである。まとめて人を紹介しても、こういふことができた。

御礼

多くのオマのカーペン(切手、テレカ、針筒、ペンナマ)ありかど、ご丁寧にしました。社主の

天然肉体詩人
小林 徳彦
名瀬

トカラの宮島での公演をおいした。名瀬は十島村宮とまわって三日目に名瀬に到着した。公演は翌四日午後八時半から市内屋仁川通り沿いにある

ライブハウス「ミロ」で行われた。突然の公演であったため、宣伝が行きどかず、客の入りには心残りがあったが、会場は熱っぽかった。本人持参のテラの音に合わせる踊りには人間のあらゆる本性が表現されて、

「ああ、悲しみ、苦しみ、泣き……」そして生と死、生誕と再生とが鍛え抜かれた肉体を通して、観る者に露骨にされていく。

△△△

どしゃ降り、屋仁川通りではあったが、熱気が会場に充ちてきた。打ち上げの飲み会は、午後三時まで盛り上がった。

体内時計

クインユラ号が徳之島の徳港を通航したのは午前十一時近かったのではないが。

朝八時にマサの空気が、ついに終り。それから三人はフロに入り、ビールを各自が手にしながら、居間でくつろいでいた。北と南の雨戸を開け放つと、新しい空気が入ってきた。南の方の敷きシート先には、モヒ畑越に東シナ海が垣見える。

「内地の感覚がよくなる。この風はもう初夏だね。」とナオがひとこと言う。陽も差してきた。昨夜から降り続いていた雨が上がり、晴れてきたのだ。肌をなごめる風はとよめだ。暑くもほいし、爽くもほい。

奥まは。マサとシキは無言であった。女目向の窓、窓ぎわに区切りをかけた空

シマヤンラーメンを逸す

徳港

境から、無言で涼風を楽みながら、至福の時を味わっているようだ。ナオは、すでに荷造りした箱を南き、底のほうから一枚のCDを取り出した。名瀬の古書店「あまの庵」主人の奥の奥から世襲したものだ。それをかける。

ビノソロの響きの中から、奄美民謡が女性の声で流れ出る。静かに静かに流れ出る。「ウーン、いなあ」シキの一声。また無言。ナオの頭の中を駆けめぐるのは、三十五年前のこと。この島のひとつ南の沖米良部島に渡った時、ひとりの老人が蛇皮線を弾き出した。あの時の響きが、朝風を浴びて、気だるくなると、たに、ビールの酔いも手伝い、いさかかマヒした脳ズイにいたく共鳴していた。奥まに、い。ロマンも唄も。

2/24 夜、豊川博昭さんに食事をして、船走にはる。

2/25 午後10号完成。市内泉町の南方新社を訪ねる。葛瓜さんが「反原発」の本の校正に追われていた。この人とは三十五年前に市内下基田に構えた「臥蛇荘」で一緒に動いていた。

2/26 市立図書館で中世史(日本)の資料を読む。夜、成合と日向宇植で百円であった(ヤキトリ二千円介隣りの飲み屋から成合がどり、貸した)「焼酎」「島美人」

2/27 午前中、荷車を鹿児島島新港まで曳いていく。車を待合室に置いて、空身で市中心街の天文館に向う。夕方六時出航の左りーなみのうえで奄美の名瀬に渡るとした。種子島の笹森エミ、屋久島のヤシを訪ねるのは次回にすることにした。先が急がれてきたのだ。竹久工展の準備があるから。

今回はなぜに平島をパスするのか

タビ立すの初めから、平島には寄るな
じつもりであった。なぜ寄らなかつたのか？

気が重く、からである。

ナオが子島に立ち寄るのは当然だと思
った人も多い。なにせ彼は三十五才まで

島で暮し、島の深奥までも味わった人
間だからだ。島を離れて十五年間にも時
ぬてゐるが、その歳月は昨日のこゝろのやうだ

た。次期総代は「ツイヤ」と言われた
が、それは早令上の順番で冗談を言われ
たにすぎないが、これは通りいっぺんのタビ

人にはかけないマイサツである。

なぜに気が重いか。それは、島があまり
にも濃密な定住生活者の集団であり、
気象には通りすがりに寄る所ではない

からだ。訪ねるなら、平島に所を回して
そして戻ってくるか、ナオには思いつかぬ。

△ △ △ △

たしかに、島を訪ねた当初は別の思
が先に立っていた。それは三十五年前のこと
になる。ナオが初めて奄美大島の沖永良
部島を友へたと訪ねたときのことだ。

彼は一匹鳥を作用として島で
すした。島という地理的に制約

された空間の中では人の動きもまた
制約が加えられる。だからタビと

いえども半定住に近づくと動きもな
る。それが心地よかつたのだ。都市が

ら流出したナオは、今更な歩を歩
その歩みに疲れをおぼえ始めた

ころに、この島という、限りなく

移動を制約してくる存在に身

をこぼだせかけた。

その止り木としての島の中で、彼自

身は、「いやされた」と思った。

思いが島に、次へ移るステップと

島を利用することを放棄し、

代りて島に居着くことを試み

た。居着いて、密な人間関係の中

に、この島を埋めえよものごと

をめぐらした。本音でしか生き

られない日常への憧憬が裏に

あった。それは都市生活の反省

から生まれてくる。ナオにとって、都

市は定住地
ではなかつた。

農村部からの移入民三世であり、

地縁、血縁も薄い。

△ △ △ △

時間がかつたにたがって戻行した

ことがある。本音はたかに島

の中を飛びかつてはいたが、同時に

タテマエもふんだんに使われてい

た。噂が噂話としてではなく、

当事者の耳に直接とくほど、狭い

空間の中で人間が生まれてくは

緩衝利としてタテマエが使われ

る。つまり、本音のみでは人間社

会が成り立たないのだ。

このころ、タビのことに戻行した

とき、ナオは島を離れ移すこと

をめぐらした。このころに気が付いたことだけ整理

かせてもらった。

由に他所移すといふ人間に、これは

流出者、漂流者といふ外には、

島の日常市になじまないだけでは

なく、ある時は、島が共同体をも



種
奄美
沖繩

破壊しかねない存在
に彼がなかりかけたことがある。

△ △ △ △

島のありのまま姿は、ナオにとま

々々このころ、まじり人間の女性の常

と映り、それを人間的と思つた。

そして、その姿を多くの人間たちに

伝えていける、へきと思つた。彼は、

せと島の外に向つてコトバを吐いた。

が、その伝えられる対象の島民

にとっては、島社会の綻を破る行

為でもあった。島外本島のミースマ

でも流す破壊者と映り、一青年を

して、ナオをこぞで刺す」とまで吐

かせてもらった。

このころには前号で書いた、岡田で

の△子と△の会話の不成立にもつな

がる。つまり、島出身の△子と△に

とて、人間的なはずの家族愛

が、相手のナオの心の中でも全存在
であると信じて疑わぬ。ナオのナオ
は人間的であるとは認めても、
すべてに優先するものではない。

△ △ △ △

その島を抜け出して、なまようナオ

の日常を支えてくれる者たちは

これまた定住する者たちである。

定住社会の内側にいるが、同時に

漂流民にもなりえる人たちである。

そういふ人たちに庇護され、先導と

れて渡り歩いている。

永存在をするものもある。があ

くまでもその一所は立ち去る場

もある。立ち寄り先で見えて聞い

たことをこれの中にとりこみ、

それを次の立ち寄り先で吐き出

す。吐き出すコトバが消化不良の

ままの場合もある。その無罪を

犯せるのも、裏に一所所を起え

なければ、口を閉ざして勝つてい

からである。それが彼の仕事

といえ、言えるかもしれない。

〇 〇 〇 〇